近筆鑑山傳圖画 上

44

運筆麁画序

書画因体細分之豊歎不可二
一点一掛頓挫之墨妙未當傳
粉扶墨貴其淡而適也而圖度
敎國子有六書法其三曰象形
象形者取近似制而物色焉泓
以書画因体豊歎不可二也蓋

善画者師物不師人雖師物風
不可捉雲不可認蔵一鑰有洋々
者甘泉有消々杳々無顕々物無
形々象作以雕繢而傳之但通
其江中必神會者能之古有顧呉
窺其妙能之者也橘守國氏素
以画鳴于世頃日有墨画之挙

凡三巻命曰運筆麁画以人傳
序因閲之歎曰物醸之甘旨之
苦唯淡也不可造甘苦鑿矣漢
乎淡乎不可造橋氏乃淡之未
乗歟一点妙跟點精一拂鼓舞
入神筆力老而益健悠如松柏
飽風霜愈見遒古也實橘氏一丁

生卽収骨法蓋在此一篇庶
幾後世游此藝者不爲小補也
以序

寛延元年戊辰秋八月

攝江
田長興識

運筆麁畫巻之上目録

運筆五行の象　貞木嵩中図　せきれい
一筆馬　山水　椋まじへ鳥
草書雛子　人丸　おし鳥
たなぐ鯉　草書點　帰居
庯　白楽天　高月宮の図
かてい　挑り牛　紫藤
雲中の龍頭　鷄　大黒

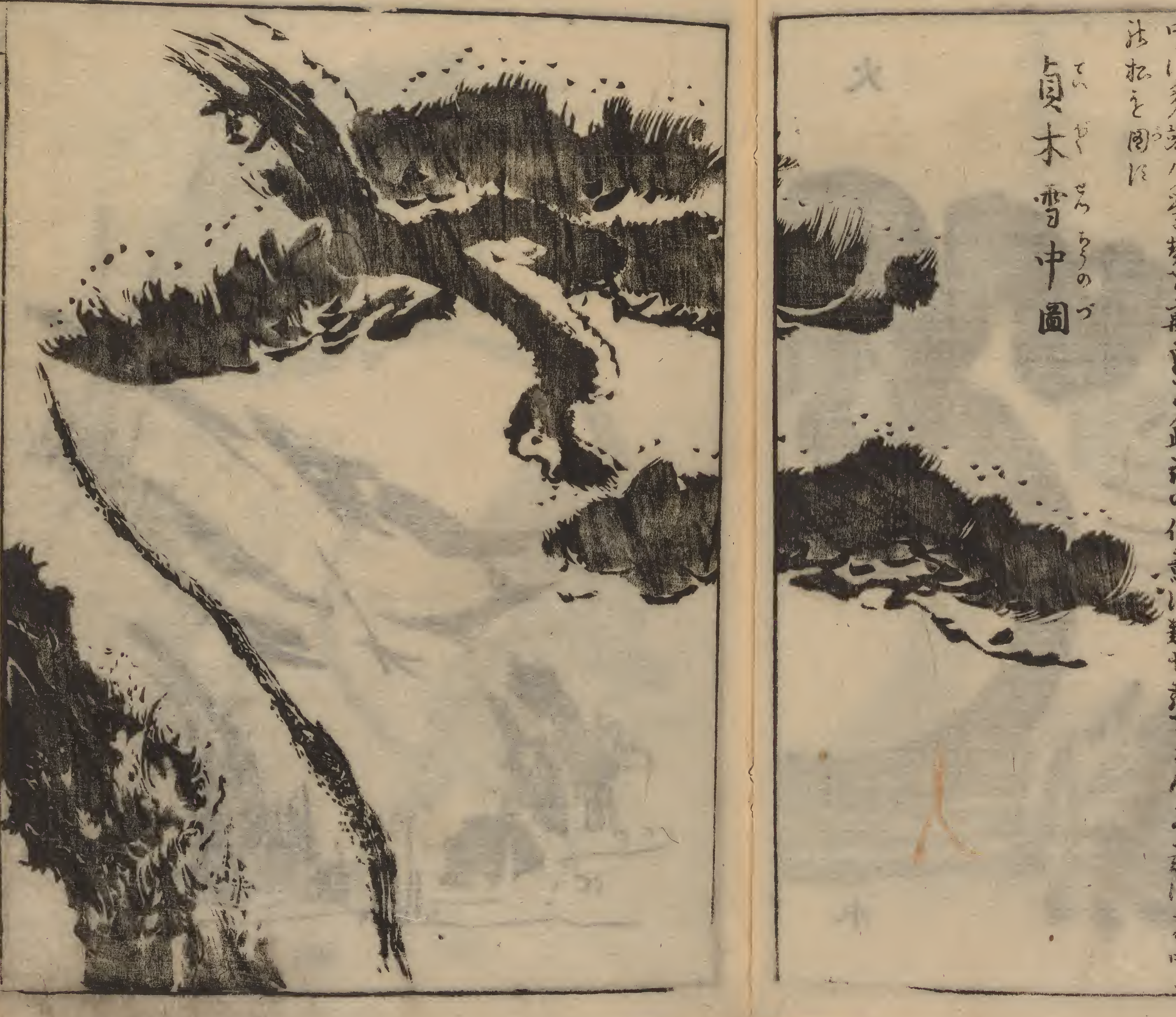
運筆五行之象

古書に新玉のごとし新紙小筆といふ事
筆乃書つゝかきそめあつむれ
其書を熟考して
かくごとくあるべし

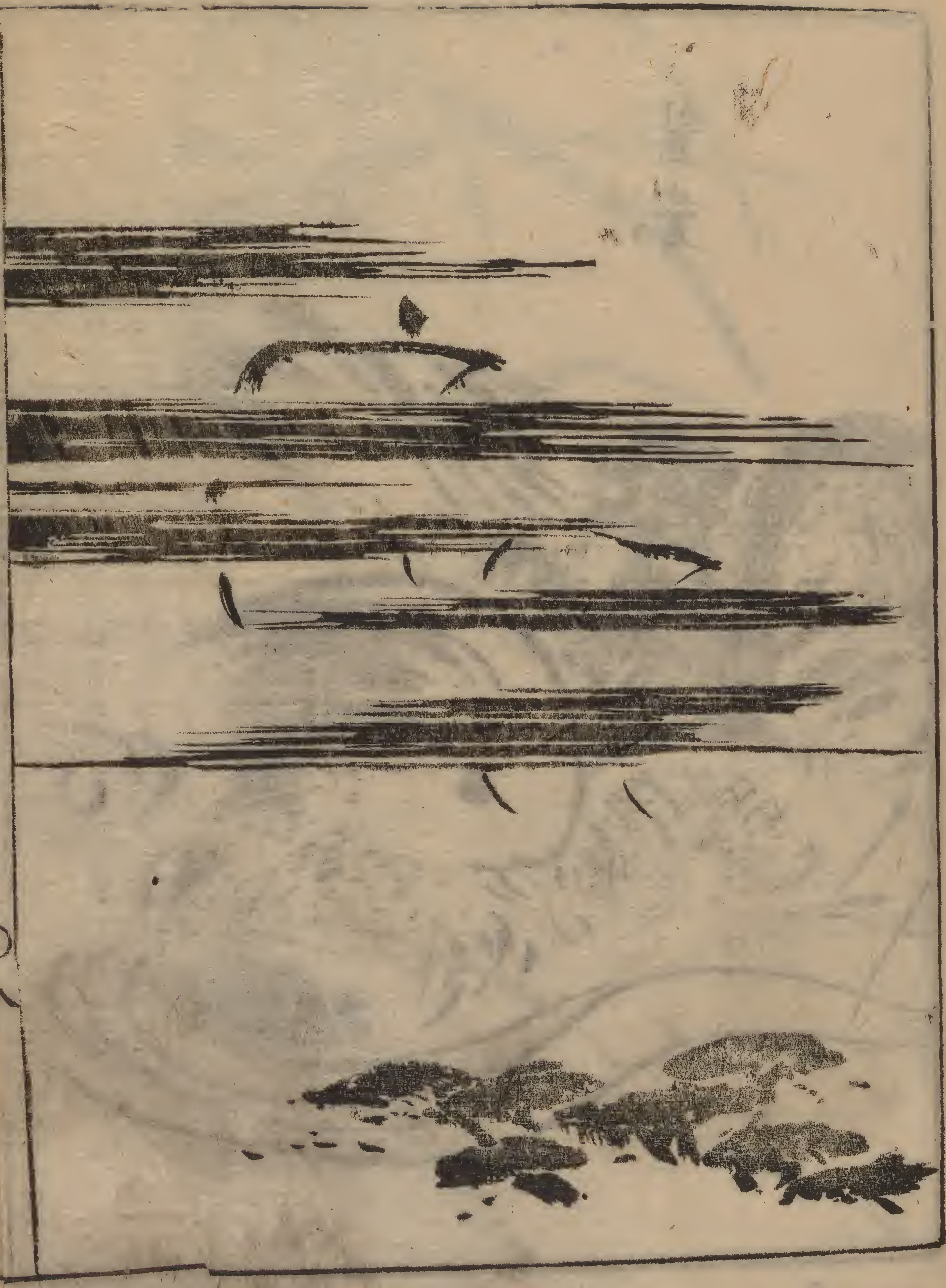
十八公榮霜後露　一千年色雪中深

書畫ハ家乃草木を描にハ千草万木多変異ありといへども就中に松むつかしハ卓然として是ハ甚色を易に千葉を保て霜雪にをいて猶まとをつゝんを作わし詩なり又松に丁固が十八公と云て三公にのぼりし故事あり是を公引る十八公といひしハ松乃一字を三字に分て七言の数に合せ一字に是三字の活動をあらハせしは名筆書としても物故多し紙面二一字の中に多く端乃筆勢と寫さとる此詩の作意に熟せ程をきハめる霜雪中法松を圖に

貞木雪中圖



若草乃志げりあれ野に雉子かしらを
さしげ尾を引あかくしかねたることくらみてそ雅なれ

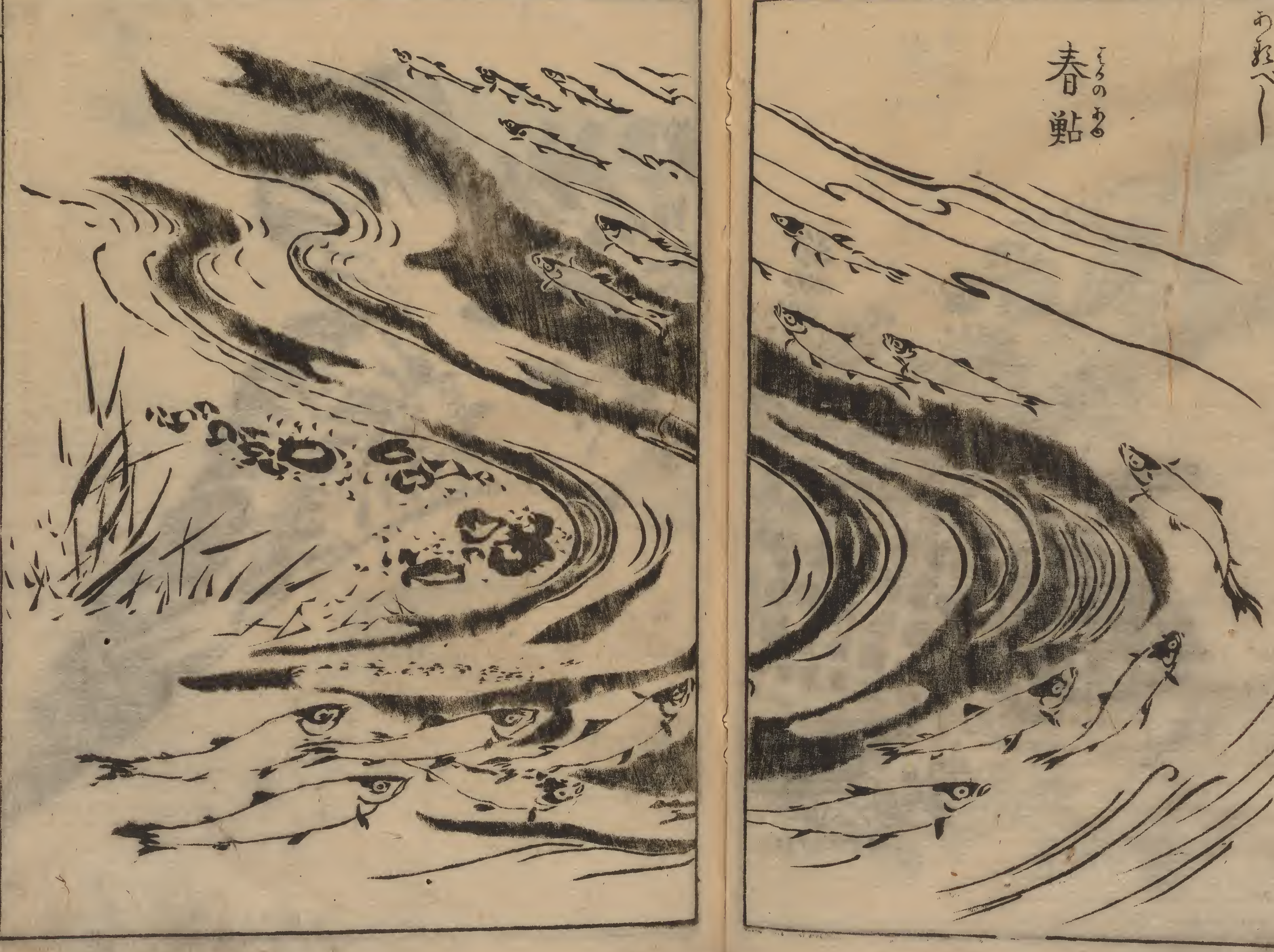


鴛鴦（をしどり）

夜を重ねて寝させて夕ばかしぞなく
そうひもあへば霜やとく離せ
此鳥行州を鴛鴦お離れば必ど一羽画くまじきるべし

泳鯉

龍は雲中をおこし潟つき浪ることを好む鯉も亦龍乃気脉ありゆゑか魚に淀を好み深潭を家とし



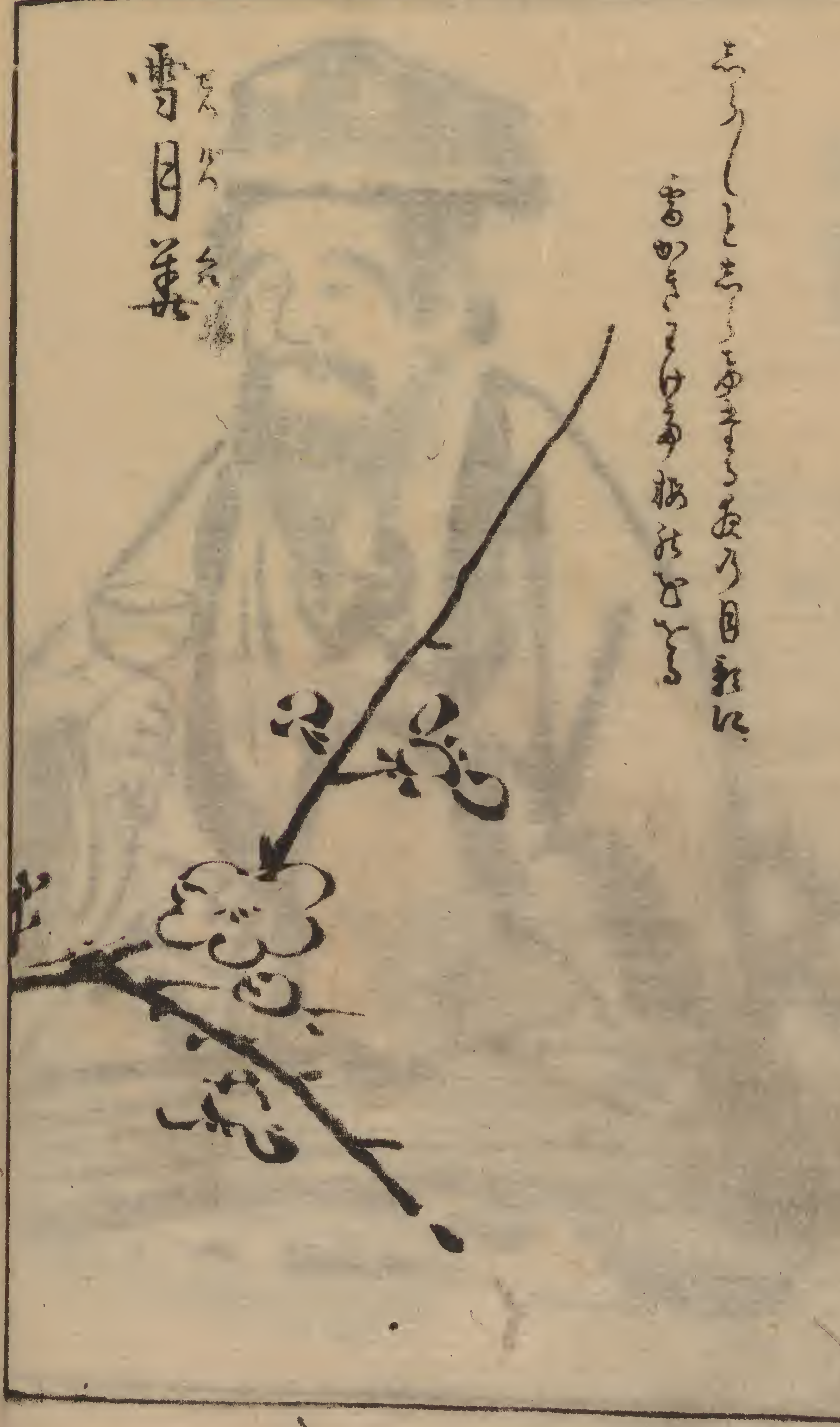
春鮎

鮎ハ山川乃其底清く流れてある水の勢ひ
はげしきこゝを好む此底来るあるに逆のぼる
昔より鯉法かくのごとくにむかふ下る体を出
生ずるあり鯉ハ淵を好む鮎ハ清き流を好むなる
わかるべし

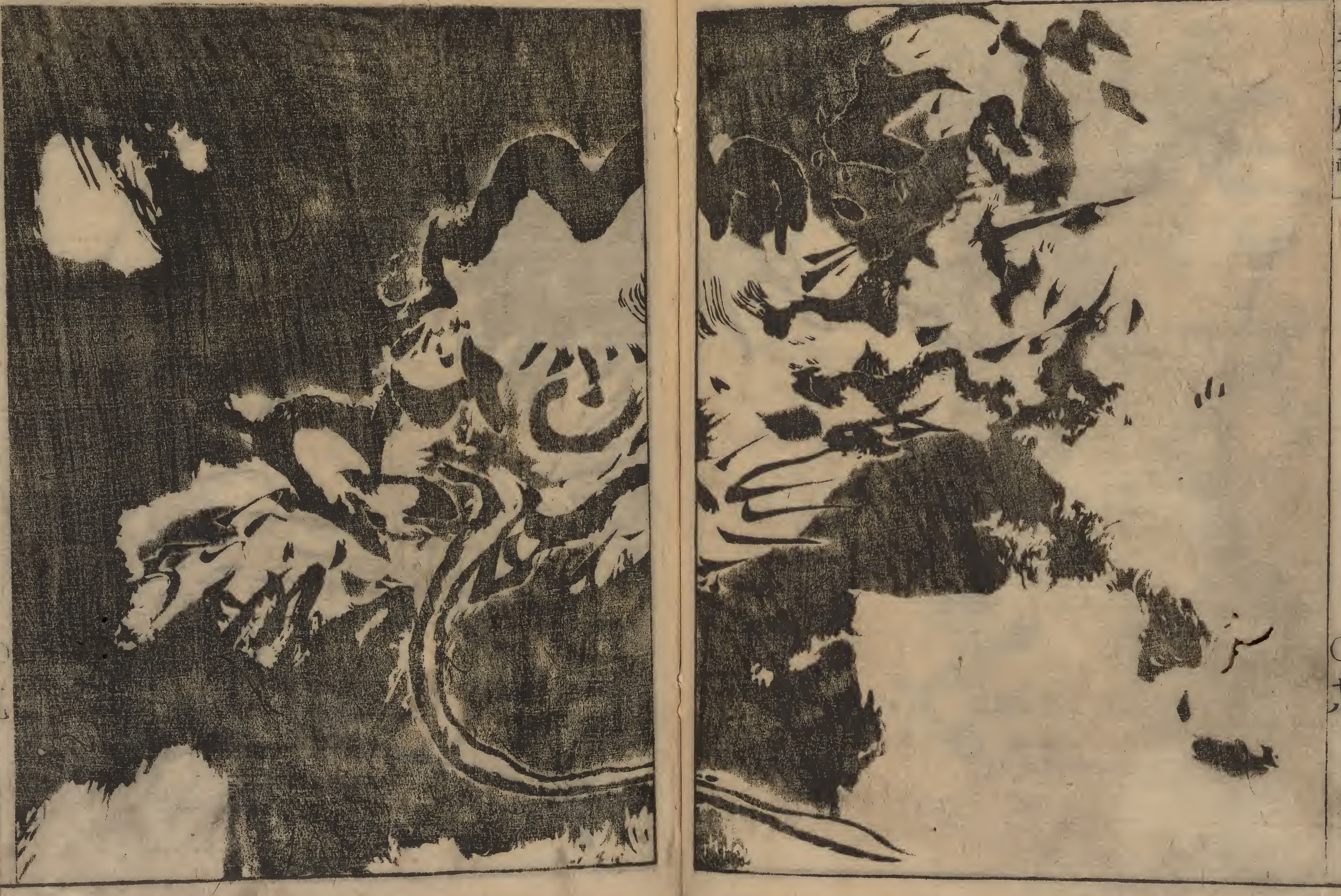
帰雁（きがん）

白楽天

唐乃代に仕へ詩文をもつて名誉を揚ける暮年に及び
琴詩酒の三ツをもつて友と呼し楽とす年老て
香山へ隠居せし因葛のうち思ひ出し書眼する
詩を識して殊さき友に書へ贈りしも次ニ書
貽むの詩意を図に



琴詩酒友皆抛我
雪月花時最憶君
雪月華



鶴亭図筆

秋元清助